

# わたしたちの人權

だれもが人間として生きていくうえで「人權」です  
できない当然の権利これが「人權」です

83

## 子どもたちの人權作文

12月の人權旬間にあわせて、子どもたちが書いた人權作文の中から、5人の作品を紹介します。(14・15ページに続きます。)

### お母さんありがとう

矢部小学校 1年 草野 優聖歩



この前、道徳の時間に、お母さんから、手紙をもらいました。びっくりしました。読んだら、嬉しかったです。「ゆうせふは、お母さんの一番の宝物です。」と書いてありました。お母さんの笑っている顔を思い出しました。

お母さんに、返事を書きました。書いていたら、お母さんが僕のためにしてくれていることが、いっぱい出てきました。僕は、「ありがとう。」といっぱい書きました。

でも、「ごめんね。」と一つだけ書きました。怒られても言うことを聞きませんでした。返事を書いていたら、僕

のために言ってくれているんだと思いました。

「さるとかに」の勉強をしました。先生が、「このかに達は、何だと思えますか。」と聞きました。僕は、「家族だ。」と思いました。「このかにが、お母さんだったらどうしますか。」と、先生が聞きました。「石をどかしたい。」と発表しました。発表していたら、涙が出てきました。一人でどかせられない時は、友達を呼んで、一緒にどかしたいと思いました。

僕は、一人の友達を呼びにいくと思いました。

二学期に、僕は、友達に嫌なことを言われました。僕は、「言わんで。」と言ったけど、やめませんでした。僕は、「なんで言うの。」と言いました。友達は、前より優しくなりました。前より一緒に遊ぶようになりました。

僕は、「せんで。」「なんで言うの。」と覚えてよかったですと思いました。一匹のかにと同じだと思いました。僕が怒って言ったことを、友達が分かってくれたと思いました。

だから、友達を、呼びに行こうと思いました。これからも、嫌なことがあつ

### 「感謝」

矢部高校2年 齋藤 奈菜



私の家族は、母と弟と私の三人です。私は幼い頃から母子家庭で育ち、母は昼も夜も仕事をしています。私は、今年で17歳になりましたが、このように成長してこられたのは、家族の支えがとても大きいです。

物心ついた頃には、今のような三人家族だったので、もちろん父の存在というのをはつきり感じたことはありません。記憶されている父の顔は写真で見えた顔です。父がいないからといって寂しいと感じたことは昔も今もありません。しかし、最近になつて独り部屋に居るときに、お父さんがいたら私をもっと違う自分

成長していたかなとか、私にもお父さんがいるんだよね、などと思うことがあります。それを思うときも、寂しさを感じません。むしろ心の中は無です。今の自分自身が嫌いなわけでもなく、どんな事情で母と別れたからといって心から憎んでいるわけでもありません。母は今まで、二

倍の愛情を私と弟に注いでくれました。たら、言っていきたいです。一人で言えない時は、友達と一緒に言っていきたいです。

### とよきちやお父さん

みたいになりたい

御岳小学校 3年 藤岡 凌馬



僕たちは、こんびらさんの相撲の勉強をしました。相撲大会の時、横村を見なくていいように、幕をはりまわしていたのが、おかしかったです。相撲大会に来ている人たちは、横村を見たらずいなるみたいに思っています。汚いものみたいに思っているのが、僕は、おかしかったです。横村だ

けを仲間外しにしていると思いましたが。

相撲大会で、おけやの息子が怪我をした時、横村のせいにして、とよきちが袋たたきにされたのが、一番腹が立ちました。怪我をしたのは、自分のせいなのに、とよきちや横村のせいにしてるのがおかしいと思いました。横村の人たちを「やつ」と言ったりして、ばかにしているのが、腹が立ちました。とよきは、「こぎやん、まちごうたしやばは、許さんぞ。」と、怒りました。僕は、絶対許さんぞと思っていると思いました。そして、とよきちと僕のお父さんは、同じだと思いました。

僕のお父さんは、役場の仕事をしています。今は、教育委員会の仕事です。この前、みんなで、教育委員会に仕事場探検に行きました。ゆうと君が、「どうして役場の仕事を選んだのですか。」と、質問しました。お父さんは、「小さい頃から、正義の味方になりましたからです。役場は、町の人たちを助ける仕事。町の人の幸せのために働く仕事。かつこいいでしょ。」と言いました。僕は、始め、

持ちを抱くでしょう。

はじめに紹介したとおり、私には二つ年下の弟がいます。弟とは割と仲がよい方です。しかし、弟も成長するにつれ、変わってきました。長期間いみ合って、母を困らせることもしばしばあります。私は弟にとつて手本でありたいと思いが、今生活してきました。だから私が今のようになれた部分もありません。しかし、時々それがあだとなつてしまうことがあります。例えば、勉強においてです。弟はあまり先のことを気にせず、結果が出せなくても不安にならないのか、努力しようとしません。私はそんな弟を見ると腹が立ってしまいます。ある日、母がそんな弟を見かねて叱ると「おねえちゃんと一緒にしないで」と言いました。私はこの言葉を聞いて悲しく思いました。私が努力せずやってきたように聞こえたからです。つまり、弟にとつて私は比較の対象となつてしまうことがあります。私は弟にそんな風に思つて欲しくありません。

最近、よくこんな弟の態度に対して、腹を立てケンカをしてしまいます。弟にはもっと自分の良さを見いだして欲しいです。弟は優しく、他人の意見を尊重できるという長所があります。私はこれをとても良いことだと思っています。私は姉弟で互いに成長してきました。母が私と弟に感じる欲しいです。

母が私と弟によく言う言葉があります。「二人しかいない姉弟なんだから。」この意味をよく理解し、いつまでも仲の良い家族でありたいです。

お父さんの仕事には興味なかったけど、話を聞いて、役場の仕事は、正義の味方なんだと思いました。かつこいいと思いました。

お父さんが役場に入つてすぐの仕事は、隣保館だったそうです。周りの人から、「役場に入れてよかつたね。でも、隣保館なら、大変ね。」と、たくさん言われたそうです。そして、字を書けないおばあちゃん達に会い、とてもシヨックを受けたそうです。お父さんが、「りようまは、字を書けることは、当たり前と思つとるぞ。お父さんも、そう思つとつた。だけど、差別のせいで、字を習うことさえできなかった人が、たくさんおられた。」と言いました。お父さんは、こんなおかしなことはなくしていきたい、なくしていくのは、役場に勤める自分の仕事だと思つて、みんなで解放研を作つて、今でも勉強を続けているそうです。だからお父さんは、毎年、5、23集会にも行くのだと思ひました。

こんびらさんに行つて、加藤先生から話を聞きました。話を聞きながら、横村だけ役場にかまつてもらえなくて、あとまわしにされていたのが腹が立ちました。お父さんの言葉を思い出しながら聞きました。役場が差別していたら、町の人みんなの幸せのためにはならんと思ひました。

おかしなことをなくそうと思つて、自分から行動したお父さんやとよきちが、僕はすこいと思ひました。僕もそんな人になりたいです。